

資料

## “沖縄戦”時下における女子学徒隊の行った看護と精神保健（その1）

當山富士子<sup>1)</sup>

### 要約

“沖縄戦”は、戦史上にも稀な凄絶悲惨な攻防戦だと言われている。このような戦禍の中に、沖縄県下の師範学校女子部および高等女学校生が看護学徒隊として動員させられた。今回は、悲惨をきわめた女子学徒隊が行った看護とはどのようなものであったのか。また、それらに絡む精神保健の問題について既存の文献から分析を行ったので紹介したい。

- 1 沖縄戦へ動員させられた女子学徒は、県下の師範学校と高等女学校の全9校の生徒である。その中で、最も動員の多かったのが「ひめゆり学徒隊」で、戦死者も動員された学徒の過半数を占めていた。死亡した地域は、激戦地だったといわれている沖縄本島南部での死亡が目立った。
- 2 本格的な看護教育が実施されたのは、昭和45年の年をはじめからであり、3ヶ月足らずの短期養成であった。指導には、主に軍医が当たっているが、中には看護婦が指導した学徒隊もあった。
- 3 学徒隊が配属された病院の殆どは自然の洞窟や壕あるいは墓であり、その環境はすこぶる悪い。そのような中で学徒たちが実施した看護は、水くみ、飯上げ、食事の世話、排泄の世話及び処理、包帯やガーゼ交換・消毒、蛆とり、手術の介助や四肢切断後の処理、死体の片付けと埋葬。破傷風・火傷・ガス壊疽・マラリア・腸チフス・脳症等の患者の看護。皮下注射の実施。離島においては食料の調達や薬草作りであった。
- 4 学徒たちの精神保健については、動員当初は「お国のために…」との気負いで配置先へ向かっているが、戦況が進むにつれ、環境の劣悪さや極度の疲労等々から感情の麻痺や放心状態、そして終いには死へ追いつめられる状況となっていた。そのような中でも、「せめて太陽の下で、水を一杯飲んで死にたい」というかすかな“生”への欲求も見られた。
- 5 戦後60年が経過し、元学徒たちが「戦争は二度とあってはならない」と、沖縄戦の語り部となって活躍している反面、一部には未だに“目して語らない”元学徒がいる。

Key words : 沖縄戦 学徒隊 看護 精神保健

### はじめに

池宮城等<sup>1)</sup>によると、...『沖縄戦は、“鉄の暴風”と形容されるほどに熾烈をきわめた地上戦闘であった。米軍側の戦史でさえ「ありったけの地獄を一ヶ所にまとめたような戦闘」と記したほどの凄絶悲惨な攻防戦であった。この作戦が日本国内の一角で展開され、そして結果として日米両軍の最後の決戦になった点でも太平洋戦史に特筆されるべきものだった。』...と述べている。また、当時沖縄師範学校女子部教授で、通称「ひめゆり学徒隊\*」を引率し、多くの生徒を沖縄戦で失った仲宗根<sup>2)</sup>は、...『第二次世界大戦で沖縄ほど戦禍をこうむった島は世界になかった。20余万の生霊の血をもって山河を染め、沖縄は“血の島”として世界に知られた。この“血の島”でも、とくに悲惨をきわめたのはひめゆり学徒隊の最後であった。わずか16歳から20歳までのうら若い乙女らが、あれほどに激しかった戦争に参加して、かくも多数戦死した例は人類の歴史にかけてなかった』...としている。

このように、凄絶な戦時下で女子学徒隊の行った看護とはどのようなものであったのか、また精神面における影響はどのようなものがあつたのか、既存の資料を分析し紹介したい。

なお、沖縄戦<sup>3)</sup>とは、...『太平洋戦争の末期に南西諸島、とくに沖縄本島およびその周辺の島々で展開された日米最後の戦闘で、日本国土内でたたかわれた唯一の地上戦である。[時期]一般に沖縄戦は、1945年(昭和20年)4月1日に始まり、同年6月23日に終わったことになっている』...しかし、沖縄戦の時期については米軍が慶良間諸島に上陸した3月26日から、米上陸軍の主力第10軍のJ・スティルウェル司令官と南西諸島の全日本軍を代表して高田利貞陸軍中將が無条件降伏の文書に署名した9月7日という説があり、ここでは沖縄戦の時期を3月26日から9月7日とした。

### 分析に使った資料

- 1) 沖縄戦をテーマにした図書
- 2) 沖縄戦を記録した県史および市町村史
- 3) 第二次大戦に関する図書

1) 沖縄県立看護大学

#### 4) 沖繩戦に関する新聞報道およびビデオ

##### 女子学徒隊の行った看護と精神保健

###### 1 全女子学徒隊の概要

表1は、沖繩戦へ動員された全女子学徒隊の概要である<sup>4)</sup>。この表は、戦後60年目にして初めて、県下女学校全9校の全女子学徒隊の記録を総合的にまとめたものである。データも新しいため、ここではこの表の数値を用いることにした。動員された学徒たちの年齢の殆どが10代後半であり、思春期真っ盛りの若き乙女たちである。9校のうち、最も動員数が多いのはひめゆり学徒隊で、戦死者も全女子学徒の過半数を占めている。学徒隊が戦死した場所は沖繩本島南部での戦死者が目立ち、いわゆる島尻戦線における戦闘の悲惨な状況がこの数値からも伺うことができる。なお、動員された部隊の病院は殆どが自然の洞窟や壕である。

###### 2 看護

女子学徒への看護教育は何時からどのようにして行われ、そして戦時下においてはどのような看護が行われたのか見てみたい。

###### 1) 看護教育及び訓練

女子学徒の看護教育や訓練は、1944年（昭和19年）から既に始まっていたが、本格的な看護教育は翌年の年初めから3月23日の各病院への配置が行われるまでの期間実施されていた。教育は、配属予定の部隊ごとに行われ、軍医や衛生兵が中心になって教育に当たっているが、南風原の陸軍病院\*では看護婦が指導している学徒もいた<sup>5)</sup>。訓練は、泊り込みで行われた学校もあり、その内容は女学校生を軍人並みに扱う厳しさや生活全般における軍隊式の規律が求められていた。

###### 【教育内容】

- (1) 内容：看護学総論、人体の構造及び作用、循環器・神経系・呼吸器・消化器・外傷及び傷痕・創の経過及び処置・止血法・火傷・骨折・ガス弾投射処置、注射や担架の使い方、伝染性疾患など。
- (2) 看護の姿勢： 保健に注意し看護すること（衛生面）、綿密なる注意と鋭き観察力（常に患者の容態・保健に注意）、勇気と服従（進取の態度で上官の命に従う）。
- (3) 講義終了後は、試験を実施し病院で演習と実地を行う。

【免許など】八重山高女子学徒隊では、看護教育終了後は全員に看護技術修了書が手渡され、准看護婦として軍病院に配属されていた<sup>6)</sup>。

1945（昭和20）年3月23日、米軍による沖繩上陸作戦が始まり、同日各学校の学徒たちは陸軍病院や野戦病院に配置された（詳細は、表1参照）。

###### 2) 病院における看護の実施

陸軍病院・海軍病院・野戦病院での学徒たちの主な仕事は、負傷兵の食事の世話や排泄物・汚物の処理、包帯交換などであったが、その状況はまるで地獄絵のようであった。

【患者及び病院の状況】 …『壕（病院）の奥には死体が毛布で覆われたまま放置され、悪臭を放っていた。…（中略）…死んで何日も放置された死体は膨れ上がって大きいのだ。…（中略）…壕は二段式寝台（図1）になっていたが、「上の奴が尿を漏らした」と始終大声で怒鳴る…（中略）…艦砲の落ちた穴には池のように水がたまる。それを飲み水に使うのだが、そこで洗濯もするし、シラミの湧いた髪も洗う。…（中略）…甚だしく不衛生で傷口は必ず蛆が発生した。…（中略）…膿でジクジクになった包帯の中でムクムク動いて、ギシギシと肉を食べる音まで聞こえる。…（中略）…毒が回った脳症\*患者は、絶えず訳の分からないことをしゃべり続けていた』…<sup>7)</sup>。 …『破傷風患者は手足が痙攣し、終いには口が開かなくなる。そうすると重湯も喉をとおらなくなる。そんな患者は隔離室に移されていく。…（中略）…麻酔薬も気休めにしかうってこない。患者は、「もういい、殺してくれ。殺してくれ」と叫ぶ』…<sup>8)</sup>。 玉城村のアブチラガマ（洞窟・図2）で、スタッフ30名位で600人前後の患者を看護していた。赤痢患者の発生、北部地区ではマラリアの発生が多く見られた。消毒は、石を三つ置いた煮沸器を載せ手術器具などを消毒する。八重山では、墓を病院代わりに使用した。ガス弾に対しては、タオルや衣類をぬらして被いした。学徒たちの中には、極度の疲労や栄養状態の悪さなどから、生理が止まったり、壕熱\*を出したりしていた。患者の状態により、一報（軽症）、二報（重症）、三報（危機）、四報（死亡者）に分けて呼んでいた。重症患者は、青酸カリ入りのミルクで兵隊が処理していた。また、…『解散命令後捕虜になり、米軍の野戦病院で看護婦として働いていた学徒もいた』…<sup>9)</sup>。

【看護の実際】 水汲み・飯上げ・食事を配る・食事の介助・尿便の処理・包帯やガーゼ交換・蛆とり手術前の器具等の準備・手術中のローソク持ち・手術中の医師の顔の汗拭き・切断された手足の処理（埋める）・ガーゼや包帯の消毒・死体の片付けと埋葬。破傷風患者の看護・火傷患者の看護・ガス壊疽患者の看護・マラリア患者の看護・腸チフス患者の看護・脳症患者の看護。モルヒネの注射・破傷風予防の皮下注射の実施。宮古では、バツヤやカエルをとり栄養剤を作ったり、薬草採りを行っていた。八重山では、解熱に木炭を使っていた。

###### 3 精神保健

ここでは、学徒たちの戦時中の精神保健、患者に対する精神面の看護そして現在学徒たちはどのような精神で過ごしているのかについて述べたい。

表1 全女子学徒隊の概要

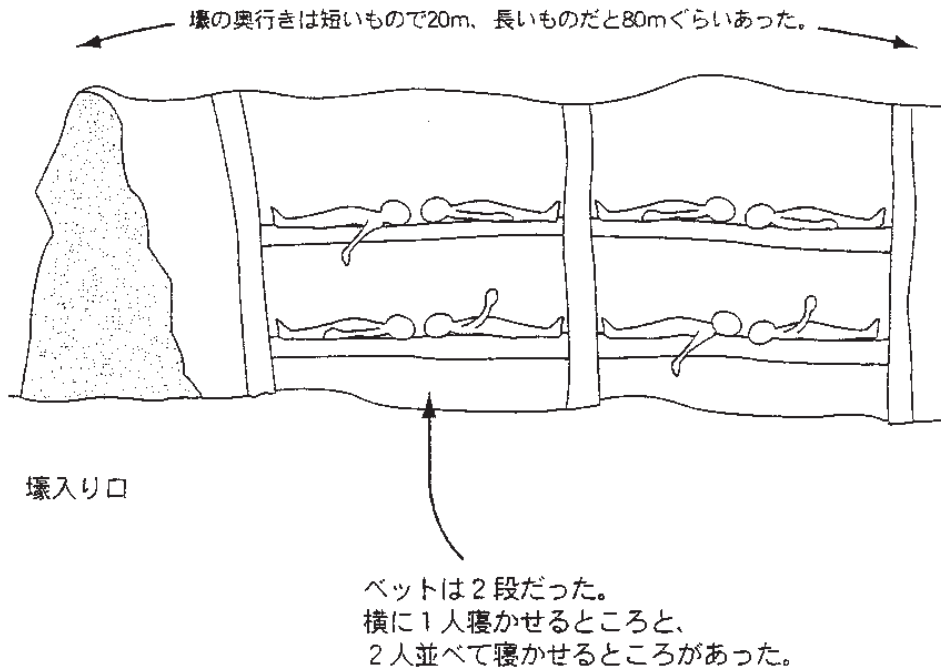
学 校 名	学徒隊の通称	学校の所在地	動員数	戦死者数	動員された部隊(通称)	部隊の所在地	備 考
沖縄師範学校女子部	ひめゆり学徒隊	那覇市安里	157	81	沖縄陸軍病院(球18803部隊)	黄金森(現南風原町)	
県立第一高等女学校	ひめゆり学徒隊	" "	65	42	" "	" "	
県立第二高等女学校	白梅学徒隊	那覇市松山	56 <sup>1</sup>	22 <sup>2</sup>	第24師団第一野戦病院(山3486部隊)	八重瀬岳(現八重瀬町)	1 うち10人は配置後家族の元へ 2 うち5人は配置後家族の元へ
県立首里高等女学校	瑞泉学徒隊	那覇市首里	61	9	第62師団野戦病院(石5325部隊)	ナゲーラ(現南風原町)	
私立昭和高等女学校	梯梧学徒隊	那覇市宗元寺	17	9	第62師団野戦病院(石5325部隊)	ナゲーラ(現南風原町)	
私立積徳高等女学校	積徳学徒隊	那覇市牧志	65 <sup>3</sup>	4 <sup>4</sup>	第24師団第二野戦病院(山3487部隊)	豊見城城址(現豊見城市)	3 うち40人は配置後家族の元へ 4 戦後遺症で戦後死亡
県立第三高等女学校	なごらん学徒隊	名護市	10	1	沖縄陸軍病院北部分室(球18803部隊)	八重岳(現本部町)	
県立宮古高等女学校	宮古高女学徒隊	宮古島市平良	48	1 <sup>5</sup>	第28師団第二第四野戦病院(豊5676・豊5683部隊)宮古陸軍病院(球5620部隊)	鏡原・上野・城辺(現宮古島市)	5 戦後遺症で戦後死亡
県立八重山高等女学校	八重山高女学徒隊	石垣市登野城	約60	1 <sup>6</sup>	第28師団第三野戦病院(豊5681部隊)舟浮陸軍病院(球4173部隊)海軍警備隊医務室(通称海軍病院)	開南・バンナ岳於茂登岳(現石垣市)	6 マラリアにより死亡
県立八重山農学校女子	八重山農学徒隊女子	石垣市大川	16	0	独立混成第四十五旅団配下の陸軍病院・海軍病院・野戦病院	開南(現石垣市)	

注) 出典: 青春を語る会編「沖縄戦の全女子学徒隊」p.315を一部加筆修正

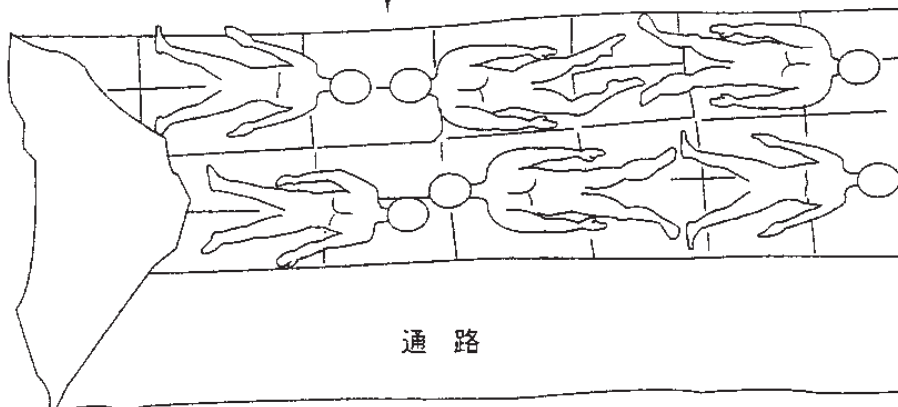
**ア. 断面図**

**図1 病院壕のイメージ図**

壕入口は、爆風よけのために、  
軍用毛布をかけている壕もあった。

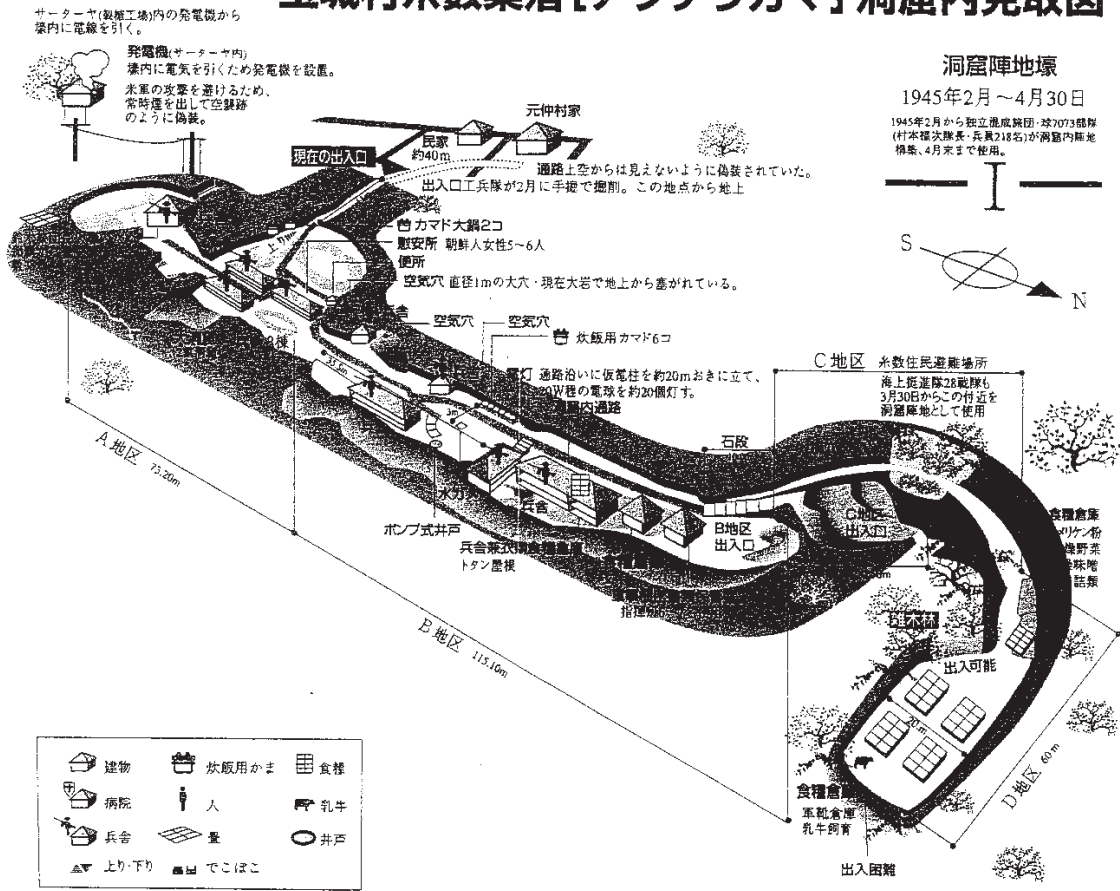


**イ. 平面図**



出典：ひめゆり資料館発行 「ひめゆり学徒隊」

図2 玉城村糸数集落[アブチラガマ] 洞窟内見取図



出典：石原昌家著 「沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕」

1) 戦時中の学徒たちの精神保健

学徒たちは、動員当初は、『「お国のために必ず勝つ」...<sup>10)</sup>、『いよいよ私たちもお国の為に役立つんだ』...<sup>11)</sup>、という気負いで病院へ向かった。病院壕の地獄絵さながらの様子に恐ろしくいたたまれなくなって壕を飛び出したりしていた。...『息を引き取る瞬間の言葉が私の脳裏から今でも離れない。最後の力を振り絞って「おかあさん」だった』...<sup>12)</sup>。解散命令を受けた後、はぐれたら大変だと無我夢中で弾の激しく飛んでくる中を走った。傷ついて苦しむより一発で死にたい。...『私は死人を見て「ああ、死んでいるの」と言うだけでぼーっとなって、考える力がない。涙も出ないのだ。...(中略)... 逃げる気力もなく座ったままだった』...<sup>13)</sup>。...『精も根も尽き果てた私たちは、もう皆で自決しようと話合っていた。「平良先生、今のうちに死にましよう」と苛立っていた。「早くやりましよう。先生」と先生を追い詰めているのだ』...<sup>14)</sup>。...『もう一度、弾の落ちない青空の下で大手を振って歩きたいね』...<sup>15)</sup>。...『こんな所で

死んだら、自分がどこで死んだか、誰にも分からなくなるんじゃないか。こんな所で死んでたまるか。新鮮な空気を吸って、太陽の下で水もいっぱい飲んで死ぬんだともがきながら、自分に言い聞かせていた』...<sup>16)</sup>。

2) 精神面の看護

脳症患者の看護：先生は体には傷はないのだが、ガスで脳症を起こし、生徒を見ても誰だか判らない。声もでるし顔も動くが、苦しすぎて暴れて手がつけられない。落ちないようにベッドに縛り付けていた。脳症患者は、頭がいかにれているので自分の傷の痛みもわからなくなり、重症で寝ている人の上を平気で歩き回って暴れる。「こいつどこかへ連れて行って」と言うと、衛生兵が来て壕の奥へと連れて行った<sup>17)</sup>。

精神疾患患者の看護：精神患者の状況は想像以上に深刻だった。近くパーンというさく裂音がすると、「アメリカー、アメリカー」「怖いよ、弾が飛んでくるよ」と悲鳴が上がった。医師の問診を理解できない者、戦闘

のショックでおかしくなった者、衣服をはぎ取り裸のまま暴れる者。…看護婦の手に負えない患者は、高い金網で仕切られた独房のような小屋に閉じ込められていた。

瀬川さんは女性患者の世話を担当した。「看護婦さん子どものことを話したい」「亡くなった家族のことを話したい」。患者は、戦争で亡くなったり、消息不明になった肉親について聞いてほしがっていた。…『食事を上げようとしても食べず、思い詰めている患者がいた。「シワースナヨー（心配しないで）生きていれば何時か会えるよ」と励ました』…<sup>18)</sup>。

### 3) 戦後の学徒たちの精神保健

終戦後間もなく米海軍病院精神科で働いた宮良さんは、…『多くの友人を失ったにもかかわらず、自分たちだけが生き残っているという後ろめたさがつきまとい、最も手のかかる精神病棟で働くことに決め』…と話す<sup>19)</sup>。また、同様に捕虜となった亀島氏は、「収容所に入り、体と魂が分離したような日が続いた」と述べている。

ひめゆり学徒隊長として戦時中学徒たちと行動を共にした西平英夫の子は…『沖縄から帰った父は昔のやさしい父とはすっかり変わっていた。…（中略）…急に不機嫌になってどなりちらす父にたびたび驚かされた。死ぬも地獄、生きるも地獄』…と述べている<sup>20)</sup>。

凄絶悲惨な中を生還した女子学徒隊は、既に第一線を退職した後、「亡き友に恩返しをする」「平和を叫ぶしかない」「こんな戦争は二度とあってはならない」と沖縄戦の語り部となったり、著書を書き残している。しかし、戦後60年余を経た今もなお、“黙して語らない”元学徒隊がひめゆり学徒隊だけでも20人いるという<sup>21)</sup>。

### むすび

“沖縄戦”は、戦史上にも稀な凄絶悲惨な攻防戦だと言われている。そのような戦禍に、沖縄県内の師範学校女子部および高等女学校の生徒が看護学徒隊として動員させられた。今回は、悲惨をきわめた女子学徒隊が行った看護とはどのようなものであったのか。また、それらに絡む精神保健の問題は何なのか、既存の文献（表2）を分析した結果、以下のことが確認できた。

- 1 沖縄戦へ動員させられた女子学徒は、県下の師範学校と高等女学校の全9校の生徒である。その中で、最も動員の多かったのが「ひめゆり学徒隊」で、戦死者も動員された学徒の過半数を占めていた。死亡した地域は、激戦地であった沖縄本島南部が目立った。
- 2 本格的な看護教育が実施されたのは、昭和45年の年をはじめからであり、3ヶ月足らずの短期養成であった。指導には、主に軍医が当たっているが、中には看護婦が指導した学徒隊もあった。
- 3 配属された病院の殆どは自然の洞窟や壕あるいは墓

であり、その環境はすこぶる悪い。そのような中で学徒たちが行なった看護は、水くみ、飯上げ、食事の世話、排泄の世話及び処理、包帯やガーゼ交換・消毒、蛆とり、手術の介助や四肢切断後の処理、死体の片付けと埋葬。破傷風・火傷・ガス壊疽・マラリア・腸チフス・脳症等の患者の看護。皮下注射の実施。

離島においては食料の調達や薬草採りであった。

- 4 学徒たちの精神保健については、動員当初は「お国のために…」との気負いで配置先へ向かっているが、戦況が進むにつれ、環境の劣悪さや極度の疲労等々から感情の麻痺や放心状態、そして終いには死へ追いつめられる状況となっていた。そのような中でも、「せめて太陽の下で、水を一杯飲んで死にたい」というかすかな“生”への欲求も見られた。
- 5 戦後60年が経過、学徒たちが「戦争は二度とあってはならない」と、沖縄戦の語り部となって活躍している反面、一部の生存者の中には未だに“黙して語らない”元学徒がいる。

### 【言葉の説明（\*印が付いた単語）】

- 1 学徒隊（がくとたい）：第二次大戦末期、沖縄守備隊陸軍第32軍に動員された男女中等学校生徒の総称。米軍の沖縄来攻必至となった1945年（昭和20年）3月、男子は各学校ごとに鉄血勤皇隊として動員され、陣地構築作業・通信・弾薬運搬・斬込隊の一員として戦場におけるあらゆる作業に従事した。女子は、白梅・ずるせん・積徳・梯梧・なごらん・ひめゆりの各学徒隊に編成され、陸軍野戦病院で負傷兵の看護にあたった。（沖縄大百科事典・上、p688、沖縄タイムス社）
- 2 脳症（のうしょう）：重病または高熱の疾病が原因して意識障害の起こる症状（広辞苑）。
- 3 壕熱（ごうねつ）：食糧事情が悪い中、負傷兵たちの看護の激務に負われる学徒たちの中には、原因不明の高熱により衰弱していく者が増えていった。この症状を「壕熱」と言った。住民たちは壕マキとも呼んだ（マキとは沖縄方言で負けるという意味）。（ひめゆり平和祈念資料館資料集3 ひめゆり学徒隊 p185 ひめゆり平和祈念資料館）
- 4 沖縄陸軍病院：沖縄戦に備えて1944年5月に熊本で編成された陸軍病院。同年6月に沖縄に移動した。当初那覇市の開南中学校に開設されていたが、空襲で焼けたため南風原国民学校に移動した。軍医・看護婦・衛生兵など300余名の陸軍病院関係者のほか、女子・一高女生の教師と学徒240人が動員された。沖縄戦ではそのほかにも各部隊の野戦病院があり、それらに他の女学校の生徒が動員された。（ひめゆり平和祈念資料館 資料集3 ひめゆり学徒隊 ひめゆり平和祈念資料館）

引用文献

- 1) 池宮城秀意他 編著：日本の空襲9 - 沖縄．三省堂，p1, 1981.
- 2) 仲宗根政善著：ひめゆりの塔をめぐる人々の手記．角川書店，p 3, 1995 (改定初版)
- 3) 沖縄大百科事典刊行事務局編：沖縄大百科事典 上．沖縄タイムス社，p546, 1983.
- 4) 青春を語る会編：沖縄戦の全女子学徒隊．有限会社フォレスト，p314-315, 2006.
- 5) 石原昌家著：沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕．集英社，p 55, 2004.
- 6) 青春を語る会編：前掲書，p 214
- 7) 青春を語る会編：前掲書，p 88-90
- 8) 青春を語る会編：前掲書，p 94
- 9) 宮良ルリ著：私のひめゆり戦記．ニライ社，p 172 1986
- 10) 宮良ルリ著：前掲書，p 98
- 11) 青春を語る会編：前掲書，p 117
- 12) 青春を語る会編：前掲書，p 110
- 13) 青春を語る会編：前掲書，p 101
- 14) 青春を語る会編：前掲書，p 110
- 15) 青春を語る会編：前掲書，p 110
- 16) 青春を語る会編：前掲書，p 100
- 17) 青春を語る会編：前掲書，p 100
- 18) 謝花直美著：シリーズ戦後60年：「精神障害者と沖縄戦」．沖縄タイムス，2005,5,26.
- 19) 謝花直美著：前掲書
- 20) 西平英夫著：ひめゆりの塔 学徒隊長の手記．雄山閣，p 156
- 21) ひめゆり平和祈念資料館：ビデオ「ひめゆりの戦後」．ひめゆり平和祈念資料館，1994年～2003年作成